

Inches

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

Centimetres

Kodak
LICENSED PRODUCT

KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black



婦女八賢誌
田部

13
2913
13



0

1

2

3

4

4

5

6

7

8

9

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

JAPAN

Ts. mms

2913
13
特

昭和九年
七月六日
東京

貞操婦女八賢誌四編卷四

村田

東都

狂訓亭主人編

第七五回

狂女大い騒ぎ洲崎の暗嵐
定正暗小逃る平浮の暮雪

單表管領扇が谷終理大夫定正へ去り文明三年の秋
御の行方あるをりて鎌倉を辭し去りて采地を置上野の
國白井に在城ありしに稍疾病の全快し此れを鎌
倉に在着り然るに定正祈願ありて歳毎に金はる
稱名寺へ詣りての疾は三歳がわども不

女賢三輯の四

せり公の次女とて這回在着のひると其後餘りなき
おき称名寺へ先着のひるべき吉市中へ素より在郷を最
巖重の觸るる人々其日の夫役を逃る道なく
その準備とどろりける徳て文明六年の春誕生も念の七日
あるが定正殿の供人と將て金澤山称名寺へ夙より来籠
りて其日申の刻る頃鎌倉へとて帰還ある路次の歩
ともゆるめく洲崎のころこの松原を通りて一折こそ
あは誰くかむむ向ふより毛髪を此方へ来る者あり近き
候ふくしく見且六歳ハ北方せまむ越へぬ婢うづぎる獨りの

乙女身欠妙なる振袖を着て丈の黒髪振り乱し小母の杖を
携へ持入公礼色一婦女あるべし定正の行列へ面も振
らざり入るぬぞ前走の雑色等後きながら立寄りてお
隔り声あり管領さまのお通りあるぬ先着の婦女奴ら
行へり行へり其所退むとて一歩も退かぬ乙女八身も入る
体なく挑る士を打仆し又ハ蹴り突退て持たる小母を
打振り獨り完全く笑ひながら定正の馬前近く寄りて
寄せども衆ふひるふとて婦女と侮りしも今もあつて
らひて一個の乙女の雑色等へさんぐみ進まぬとてひま

女公賢三輯の四

たつ其の... 這方小茂... 松蔭より... 一箇の美...
宝篋... 管蓋... 狂女の側へ... 身を寄せて...
抱止るを... 小笹をひ... 瞬間小狂女...
組立て... 腰帯... 狂女を... 處
女ハ... 振りの... 皆さ... 澄が... 曲者ハ捕へ

と書き... 欣喜又... 感ドて...
けり斯... 定正ハ... 那尾の... 得と
見の... 近臣ハ... 近付て... 令さる
... 處女の... 歩み... 正し... 如らる
... 白徒を... 處女の... 捕へ... 天晴の
... 和子の... 對面... 人
... 賞美の... 辱くも... 和子の... 對面... 人
... 管領家の... 敏く... 此方へ... ありて... 言ひ... 處女ハ
... 狂女を... 其終... 至て... 那近臣の... 跡ハ... 付き... 馬前... 近く
... 馬より... 下... 道傷... 松蔭の... 芝...

児を遠く世を懸けりて掛りて處女小對ひ今其方の働きを馬
上より一覽せし處女の身中六有がた後群のも世より
基より賤しき者ありて隠すしるも八和女の事ありて
さるふ言因せしと聞かして處女ハ臆する色なく作を返さ
憚りながら再侍変ハ當春よりお屋形の大契へお側づゝり
道と懐く不束者定めてお國もどくさせう錦の
此流の夏小つき在祈せさかき一糸是よとの作せうけし其
夜よりお屋形を立出で鎌倉の地りのうらなひを返すこと
在くまを隈なく身ねけりしうらなも是ぞと思ふもうらな

夫より武藏下総へととろろぎてある道程が言訳の遠く
坂井木ころの峠を計りて持病の瘰癧を侵さる林鹿の訳を
歩むがさふひる辻堂の立寄つて斯頃苦痛を堪へら
とも日も暮れて宵月も曇りがらある薄團の誰か
辻堂へ忍び寄りある曲者なり梅子如何と窺ふに腰の
付たる盤纏を肩かけ盗み取らんとする程のきつと争ふ
其折しも彼偷兒の懐より落るる睡錦の簾と見ると
て早く取上ると那方も白徒左右なく渡さざれば引合
時し俄に降りおと村雨のやれもつらさるる

女賢三輯の四

終つひのつひはおふへり一ひともも路ち用りとを身みののままとしのの倫りん
 見みとま衣い衣い一ひとをを疑ぎりの思おもひも又また詮せん術じゆつももささふふ一ひと且かつ
 お屋や形かたちへへ立た戻もどりり是こゝ等らののトトをを稟りんひひがが其その後のち曲まが者もののの鑿せん金ごん穿せん
 一ひと夜よとと明あけあのの角かく痰たんのの全ぜん岐ぎぬぬびびままららぶぶららははららうう一ひと
 どもども國くに行ゆふふ兩りゆう日にち道みち當あたりり今けふ月つきさんさん己おのれのの時ときささるる頃ころ旅りゆう宿しゆくとと出でるる
 路ち次じをを急いそぎぎ今けふがが當あたりり糸いと糸いと一ひと小こ巷ぢやうのの噴ふん身みとと兼かねまま君きみ史し
 新あらた領りやう所しよ稱なづ名な寺てら今けふ朝あさよりより山やま春はる籠かごにに在ありりてておお帰かへりりとと
 孫まご子このの山やま行ゆ列りゆうのの美みとと安やすをを余あま行ゆききもも深ふかままんんとと最さい末まとと

ちてち那な方はたよりより小こ松まつのの篠しやうのの身みとと君きみのの通とほ御ごをを候うややおお行ゆ
 別わかれれもも衣い衣い一ひとをを疑ぎりの思おもひも又また詮せん術じゆつももささふふ一ひと且かつ
 仕し方はたととおお世よののああららんんハハ様やうてておおりりままららももおおままららうう不ふ敵てきのの
 女むすめゆゆ思おもひも一ひとをを疑ぎりの思おもひも又また詮せん術じゆつももささふふ一ひと且かつ
 虚うそ更さらううちちままをを一ひと仕し一ひと付つけをを讀よみみ卑ひ下げせせ一ひと言こと話わをを定さだまますす
 實まこと正ただままとと思おもひも一ひとをを疑ぎりの思おもひも又また詮せん術じゆつももささふふ一ひと且かつ
 赤あかとと且かつ空から鏡かがみのの鏡かがみをを見みるるののししとと嘆なげ賞あやししてて物ものををああららわわぬぬ
 小こ藤ふじとと我われもも天あま晴はれれとと言こと處ところ女むすめもも今けふ日ひのの御ごささののままををああららわわぬぬ
 誰たれもも一ひとをを疑ぎりの思おもひも又また詮せん術じゆつももささふふ一ひと且かつ



文賢三郎の四

〇六



狂きやう ふま
不狂人ふま
狂きやう くら
狂きやう ら
狂きやう ら
狂きやう ら

件ことの由よしの供たてをまか進すすむまさるまよと思おもひの外ほか隠かくし持もつる儀ぎ鈕にゅうとなす
見みせせど定じやう正せいの股こ腹はら目め掛かて突つくとふ定じやう正せい運うんやま買かりけん
お道おみちが掌てのひら頭かぶ俄たちみ乱みだれて股このひらりを突つくまる僅の浅痕あと
言いひまり思ひ寄らまるまるまだ駭きまり後辺の方かたへ
一い間まをまり飛びまるまるまといふ惜といふ間もなく踏らんて
一い討うと焦あせ燥は道みちが必かな死しの情ひ吐つ嗟あとまり近居ぢ等らハ主
人ひとの前まへのまままり防ぐまお道おみちハ変ともせど愠おこるまるま
怒おこりおびげままり定正じやう敏みんくまを怒るまの刃を試まよ断つ
言いふ吾侪われらハ武藏ぶざうの岡氷ひやう川がわ明あき神かみの神祇かみ官くわん渡わた谷や典てん膳ぜんの

處ところ女に道みち今いま年とし積つりて十じゅう八はち歳さい吾われ侪ら父ちち有ある典膳ぜんハ汝が乃の
不ふ意いをうる非命めい死しらるのまままり行領りやうとさえ奈奈なハまり
其その无な念ねんハ斤時ときも忘らず間まま俱不ふ載ざい天てん馬ば年ねん月げつと
送おくりふらまりむ時ときをうん花の春俣まち得える今日けふ只ただ今いま汝
小こ後ごも怨まの一いっ太たい刀とう敏みんくうけよと言ひつく飛鳥との如くふ
をまり其時とき遠とほ方かたの躑躑しつしつ踏ふ一いっ糸いと糸いとの狂女にハ身を死し空繩じやう
まりにや御ご侍しやうらまりる彼かの腰こし帶おびを引かり縁ゆかりで准備びんの韃
刀とうと袖の中にうり取出だしてお道おみちをまり扇が谷の士卒しやくの中へ
次つぎで入り吾侪われらを推まり思おもひつる最前さいぜん狂きやう女にと見せらるら
女に賢けん三さん韓かんの四

女賢三韓の四

らを謀まつらるる 實ま情とハは洪あ谷や典て服んさん女にのは身みはは先さずらで
成長せいうらおの道ちさののは腰こし元もと支しといひし人ひと吾われ侘わひひをもおのれ
定ま正まおの主ぬしのは仇あだ思おもひし知しるるやと言いひしけしてお道ちと信小こ尖せん
刀やと並べて砍き込こむ勇婦ゆうのは御ごき堅堅けんへ六餓うる虎とりて
群ぐ羊やうを強くどく兵との兩りゆう女にょ小こ砍きまし且かつ扇あふが谷のは邊へ兵へい士し
卒そも信小こ辟へい易いし七備びをます小違ちがひもなく我われ撃うち當あたんと強
勃はつと終つ小こ乱らんとて逃にげし其その時とき管くだ領りやう定ま正まハ薄疾はく小こ屈くつ
廿に日じつ大だい將しやう山さん及及び以もつ糸いとのは馬うま小こ打うち跨かり逃る自方かたと罵たけませども
崩くづれとまさるる碎くだれとまさるる争あらふ柱ゆり変かへのるるべき雜ざ兵へい等らに

誘さひこてまるる逸い走しと踏乱らんして逃にげしと兩女にょハ波波なみとて落おちし
かし返かえせ定正まと言ひしけし短たん刀とう打うち振ふく一町ちやうをり逃にげしやども
何なに時ときのは間まみく口くちのは暮くれて頃も孫生まごのは下した自みづからは骨ほね圍かこ
あらふ空さえもくま曇りしる兩僅わずかひみおの道ち等ら二に女にょハ便
きく思おもひしど余とそがしも猶縁ゆかりいどを多くをまさるる小こ頃ころのは頃ころ
猶なほ洩ゆるさしと進みしる結り折りも斤しん辺へのは一い叢そう茂しげりし
若わ蔭かげより顯目めからる一のの軍ぐん勢せい整ととのへ婦女にょ武ぶ者ものもあらう
遠とほ那なあらて九名なをり前まへ面めみ我とし大だい將しやうハ歳も四十し五ごをり
こらるる程ほど遠とほきか丈ぢやうのは黒くろ髪かみ押お切きり姿ハ

女賢三輯の四

殊勝の見ゆきともいへば極き女丈夫準備の長刀股挟
競ふて退ひ来るお道等兩個とさくさう當りて一圓小圓を
吐とを揚うけける

第廿六回

道と柱て愛嬉一賢を擒ま
鞘を返て義女孝婦小會ま

再説お道等兩個が今定正と退ひ敷んと競ひくりり
向ふの方へまわつて退る一個の勇婦小稲村の女強居
真間の愛嬉と喚く者めて定正とらめ花の方の公ゆも
脛ふをりて今日え称名寺の素籠め之伴まると知られける

當下愛嬉へ鼠懸凌のい社の上ふ玄色縮緬の袷着あつる其
俣み裾小短く取あげて凌の鉢巻結ひメら白柄の長刀股を
とてお道とまらると白眼つ渋谷の乙女道とやら勿体なくも言
領さぬを親の敵の仇人のと身の程知らぬもやぶがらる命六
和女が今の働き乙女似氣るま大膽武骨若も今より
公せりりらる管領さぬへ降来るま命と助るのそらるる
功めよりて六身のまかり愛嬉が執成るやうやどあ思ひ
直して降来しや夫ともいふまご迷ひ覚むる此長刀の切味
見せてはるるせんとさるは是てお道ハ愠つふ得堪む疾速

つらなるは死の覚悟も太刀取り直して些とも憚まざりて
其方が國及び真間の愛憎で有りけるよる耳穢しく
あき降恭ゆり差出て怪我を為後より及をひつて敏通
しや夫ともうそ柱ゆるり先其方より一討めと言ひり我む
不敵の廣言憎まも憚りしと愛憎も從ふ喘りぬ喘りぬ婦
女武者各々御物を引提りてヤツト被りける諸妻と俱に整く
衝ひつらうを鎗長刀と後前も飛越及越ひるまは攪まど
お友と侶も愛樹合ふて右ふりけ又左ふり流き至妙の働き
當るふ前き目瞬間の六七個矢庭の命を覆りて送るも

痛疾を負ひぬはるく忽地滝と乱れをを両女の得しうと
まはく我も愛憎も同掛て戦ひて掛る折もとをわれ定正の
近臣難色打連て時分を計りて久しき準備の松原打振
打振雅捕揃て渡りて力と合せて戦ふはふお道お友の
西宮好もいやく心を励ましを必死の働き攪むはらねど
郷の洲崎の松原より今ふりて一牌のまら棄れ突
戦間あきのそら後清自方のあつるあものごとく僅か主従両女
るは六流石女子の氣骨をそとれわくはと踏みあはく戦ひ
危なく視ふける流る所は片垣する芒小笹の茂きよりはと

揚るる関の多と侶の射を多数の征箭の扇が谷の
雑色等射を矢庭の五六人おろし枕の介を
伏勢ひつと思ひふけさば駭き強さを道等計ぬ様
兵より力を得て尖刀をるどく戦ふう案下那方の笹系
より顯はなる四個の美婦持する弓箭せうとと投槍
準備の短刀打振るる扇の谷の多勢の中へ面もろく
入るる是別別人をいざお梅青柳八代お安の四賢女を
有るける任てお梅等の四賢女の四方八面を破るるて
力と合する小ぞ愛嬌の是等の様を視て自方とひそふ

招きを律如此と秘計とある一五名をうりせ忍らせ其
身八猶も諸軍の先主士平等を罵勵する那村捕れよ
逃さると襲し下知をるも程の多勢と憑む少卒等入
乱はまるる五代アを頼りの挑と戦ふのうり骨圍るるに
炬火打落さるる敵味方の奔へくむるは
同士撃し七空の命を墮をもあり余はお梅等の四賢女も
道お友の両勇婦も東方西方をを回して別々ありし
ども此ともひる心氣色さく千變万化の秘術と尽し嘯嘯
撃も合突合頼りの捷の素うやぶる扇が谷の軍兵等へ

勢ひは碎易もあて早にとらふを皆諸侶の人権撲てを崩さし
六六個の勇婦のゆりて我まてお梅八代お友の三個の扇が谷の
辺居をを追ひ懸さんとを走ゆが青柳お道の二賢女の愛嬌を
追ひつ二町三町或ひ六四五町五六町とま程の追ひ捨て定
正せしむせうあひ余のミ戦ひを好ひあつたねば早くも迹を
瞞まじり己が随意退まけり其中のお安一個の地をよりしと
衆の先立敵の逃るを追ふやふあももころの園をれば十町
あまも来しと思ふ敵へ早くも落果しうけん四辺の追ま入
音あけはばすに望まをうらめて残の情し氣しイと居し新く

止まふらふに元来一道を離れを回らし一掃て均せし
材とてさうごうり行折しも思ひがけりさ敷薩よりさッ掛らる
勢と信ふ投出しる鍵鍵の引入さきて外られぬ地ある多
敷の懸兵ありうらまのりか安をたき之終の焼をぞ掛らりける
可憐お安が落命此未憂目ふらつや否や今遠回れも焼
屋をこき開け後の回りの委しうん閑活休題りか道入討た
援兵を得て難なく敵を追ひ去りぞけり一旦爰を立退て折を
見合せ定正を懸て本意を遂げんと思ふあつたあ友の定別れて
行糸の如きればと名此行を落果しか若智れりと右の左の

あつ くらふ くらむ 如方 暗夜の 変る 且つ 尋ねんとする 便
按の首を傾けても 如方 暗夜の 変る 且つ 尋ねんとする 便
く 其ら 放公く 此辺に 居て 扇ヶ谷の 大軍の 再度
寄を 来り 大戦の 芳き 身ひらりて 這回へ 防ぎと 難
今定正を 獲得ぬの 身と 此身と 之の 失つ 智る 者と 笑
まん時を 俟て とも 腹の 腹の 志へて 案内 智
つる 道る 且つ 闇も 迷い 徐くと 瀬戸の 系る 隈家を
目當の 道を 急ぎ 行くと 程 迫き 明神の 杜の 這方 来
折しも 迹より 窺ふ 曲者 あり とも 知れ じつと 行つる 那
曲者 あり 見て お道の 方 たる 短刀の 錯を ちと 拾つる

氷川の 神獄 洪谷が 處女 あり 逃る マア 侍ら ちと 言ひ 且つ
お道の 此とも 強ぐ 静の 後方 を見 入りて 誰か 知る ぬが
入らざる 腕を びらして 後悔 せぬ 極め 其所 放し ちの 言ひ
津も 身と びわつて 振む ぐ 曲者 へ 猶放 され 錯を 拾ひ
其 俟て 此とも 動く ぬ 大カ ぬ お道 へ 後き 且 怒りて ぞやと
引く エイヤと 引く ちと お道の 短刀 へ 差 する ちと ちと
抜けて お道の 前へ 曲者 へ 鞘を 行ふ ぬ 振り しま 後の方へ
ちと ちと 二足 三足 とも ちと 得 ちと ちと お道 へ 此 間 へ 片 辺 へ
草の 身と 隠し 其 俟て ぬ ちと 時 件 へ 曲者 へ



あまの
青柳
再び
お道
試ま



最本意なげふうを跡見送りぬ數度嘆息して居る
あふ心もさして急須で瀬戸の方へと走りゆく前活不顯武
截の國久良岐郡金澤なる瀬戸村の行辺りぬ茶葉の棟
衆依く古びし杉の生垣ありけけける枝折戸ハ浮世の不
隠家と言へどもおまゝ一住居あり折しもあま那お道ハ曲者と
挑まゝ一習ひ覚え一術をりて全場と道は去りつても
稍此庵ぬ来しやふ四辺見まへ一枝折戸を卒度か
明く内ぬ入りて勝よおまへ一変るは六暗まふまよらざ
うぐう、火桶の側へ這ひ寄ると火箸の先を埋火と

堀りかゝり附木ぬらうと先燈火を照し懐き懐よりと
父典膳の信牌を取りか佛壇へうやうと備へり遙々
あつてぬとつる父上さぬ無心无念でござんせう其心无念
さうさう千辛万苦の月日を徑て今日といふ今日定正を
計らひおひせし一敷めと思ひ一変も奈未與美の腕の乱
且お思つども聊痰を負せしめとて不覺とて口惜き
夫のさうさう行腕とも憑き一お友ハ行儀知るは今も此
家へ帰らぬ乱軍の中へも可惜命を預せし心がらん人夫
のさうさう最末數多の兵士等ハ捕圍まれてお友と二個既

女賢三輯の四

戦ひ勞き一々危ふりしを伴ひ援けを乞ふる四個の女中
何所の人ぞと問ひも甚だ禮え言ひ且ね必死の場所ゆゑ是れ
その分別と一々奈らりけん氣掛りてと言ひつゝ外面を見ず
はむろりと云ふ一平の涙の實情はつらつら孝女の心を哀れ
も知る人ぞなき一家の絆訪ふ只松風のそ最物凄く更なる
其時お道六父の位牌と腰の袋びー錦の旗を俱に伴禮の
中へ納めて郷より所迄は憂へりー鞆をき短刀をよみ取り
上げつゞ見ゆ訝し氣ふ。合点のゆるぬハ先刻の曲者暗き
影を直ぐ変ぞともう一つふ姿ハ見とらねど婦女の似氣なき

不敵者のゆゑ那と相ひの間取りて大軍再度寄せ来るその
時と六訪ぎがう一丈夏の前的小夏ぞと思ひて其場所道れ
うども父上きぬの遺物ぞと行時放さぬ短刀のと言ひ時那
方の垣間より其鞆色ぬぼんきと云ひつゝ立出る一個の乙
女ありうる色なく枝折戸を明て母屋の縁側へ我を登りて
お道ハ見ゆ打獲き一々又更み處女の顔を熟視て其方ハ
最前明神の社で合合ハ一曲者なりと云ふや郷のふ並み懲り
せで爰まで来ハ夏虫の火の寄るより深敷るまこと知れぬ
命を捨ゆ来ハ率もの内をあらせんと言ひつゝ苛急て殺めんと

女八賢三傳の四

〇十七

我^われ^らを^を柱^{はしら}と^もも^もう^る腕^{うで}と^信の^ま遠^{とほ}方^はの^速くも^勢を^うけ^り。マア^ま待^ま
あ^やん^せお^道さん^ん吾^われ^らが^此行^{この}へ^来る^も種^{たぐ}く^深い^子細^こひ^るの
先^ま其^{その}刃^{やいば}を^おも^てよ^と言^いひ^ます^お道^の河^がわ^りの^先祖^{せんぞ}刀^{やいば}を
行^{この}辺^のあ^まま^ま處^の女^をの^顔を^右視^み左^を見^て合^あ点^のの^今の^言活
吾^われ^らの^名ま^をお^もう^る和^わ女^に。サア^{その}不^ふ審^{しん}の^理を^うけ^り吾^われ^ら
お^前と^宿因^のの^菊坂^小六^の娘^青柳^定めて^覚へ^んせ^う
去^こる^七月^の念^の五^日の^日も^丁度^宵圍^の星^さの^暗き^雨空^の
圓^の塚^山の^敷蔭^のお^油さん^の必^ひ死^の程^と言^いへ^ばお^道も^打
領^り。計^はら^しめ^助け^と妃^の名^まを^あら^うる^吾れ^らの^嬉し^き迷^ひ

積^つり^おの^法の^親身^の実^ま情^の見^へる^遊遊^の會^のの^公の^顔
ひも^慥念^を錦^の旗^をよ^蔓の^敵へ^近寄^りて^親公^の仇^を報
いんと^寔の^得る^者女^の操^其折^後方^の聞^人の^のり^とも
お^ねね^身の^う女^の一^伍一^什を^物を^らる^時も^行辺^のお^しま^てる^る
疲^て負^ひの^悪女^が窺^ひ寄^りて^吾れ^らの^行持^をと^り取^り去^りる^を
孝^やと^争ふ^うち^の旗^のは^さり^と引^解け^現は^なる^雲の^龍
夜^よの^中も^史と^視し^のお^しま^てる^人と^思ふ^もの^やら^し聞^の
途^どを^うら^みひ^争ふ^うち^の突^つき^可憐^や財^の深^の谷^の底^へ
落^おち^てお^しま^てる^とも^明近^き月^代の^顔見^合を^て這^方

よう名義掛んと思ふうち不思議の術にお前の決意本意
 きく其場を見失ひ残り惜しきを今度で再會もつぎ母の
 奇縁。そんら最前明神の杜で出會し曲者も。あつと
 吾儕が戯まお前の心をひき見らる。そんらあつと今度
 短刀の鞘に愛ゆと青柳が腰よりして取りか
 まを八道の受丸完介と送る。あつと美人と美人猶這四
 長けきども此巻のいも説尽さまねハ斯頃爰の筆を
 折へ又後回の分解を听ねる。

貞操婦女八賢誌 四編巻四

初田

